

【#3】ワークショップ

まちの記憶をなぞり、歩く

災間

スタディーズ

震災30年目の
“分有”をさぐる

2024.11.23 [土] 10:00-18:00 (予定)

ナビゲーター —— 古川友紀 [ダンサー、散歩家]

参加費：1,000円(資料代込) / 持ち物：石一つ

定員：7名(要事前申込、申込多数の場合は抽選)

申込：ウェブサイト (<https://kiito.jp/>) よりお申し込みください

※小雨決行・荒天中止 ※プログラムの詳細は7月頃にウェブサイトにて公開します。

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸、災間文化研究会、阪神大震災を記録しつづける会

助成：JR西日本あんしん社会財団、ひょうご安全の日推進助成事業

KIITO:

【#3】ワークショップ「まちの記憶をなぞり、歩く」

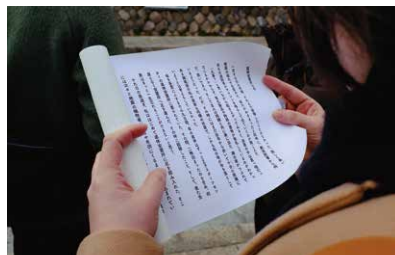
「歩く」という素朴な行為のなかにある「動き続けること、感覚が開くこと」に興味を持ち、さまざまな人たちと歩行の実践をしてきた古川友紀さん。古川さんは、2018年、阪神・淡路大震災に関する演劇への参加をきっかけに、神戸のまちの記憶を歩いてなぞる「おいしいワークショップ」を始めました。

第3回は古川さんをナビゲーターに「おいしいワークショップ2024 ver.」を実施します。身体を動かし、地形をたどる。土地の記憶につながるテキストを読み、それを声に出し、過去の出来事に思いを馳せる。ゆっくりと時間をかけて、まちを歩くことから、自分とは異なる誰かの記憶にアプローチしてみましょう。

ゲストプロフィール

古川友紀 | ダンサー、散歩家

1987年、京都府生まれ。歩くという素朴な行為のなかにある運動の持続と世界の受けとめ方に関心をもち、歩行にかかわるさまざまな催しやプロジェクトをしている。主な企画に「即興散歩 アルコテンポの会」、「おいしいワークショップ」、「歩録」シリーズ。ダンスや演劇の作品出演も多数。



おいしいワークショップ瀬編(2020ver)の様子

関連プログラム

■ 分有資料室 2025年3月30日(日)まで / 2Fライブラリにて

災害にかかわる記録や表現を見る、読む、書くことができるスペース。「災間」と「分有」をキーワードに集めた記録・表現の書棚「分有と表現のライブラリ」、関連プログラム「30年目の手記」を書くためのスペース。1995年から現在までの災害や社会にかかわる出来事を追うための「1995-2025 timeline」、1995年から震災手記集を出版してきた「阪神大震災を記録しつづける会」に関する資料展示で構成されています。



■ 阪神・淡路大震災から「30年目の手記」

阪神・淡路大震災にまつわる手記を募集します。お寄せいただくエピソードは、震災当時に限ったものではありません。震災から30年のあいだにあったことや感じたことなど、誰かと分かちあいたいエピソードをお書きください。

募集期間：2024年1月17日(水)～12月17日(火)

募集期間中にいただいた手記は、期間中に一部公開、終了後に原則全文公開を予定しています。また、「阪神大震災を記録しつづける会」手記執筆者とともに集まった手記を読む「30年目の手記公開ミーティング」を分有資料室にて行う予定です。

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸、阪神大震災を記録しつづける会、災間文化研究会 / 協力：一般社団法人NOOK、神戸市立図書館 / 後援：神戸新聞社、NHK神戸放送局、NHKエンタープライズ近畿



主催団体について

災間文化研究会

さまざまな災厄の間(あいだ/なか)を生きているという「災間(さいかん)」の視点に立ち、社会を生き抜く術としての文化的な営みに目を凝らし、耳を傾ける試みを行うグループ。メンバーは佐藤李青(アツカウシール東京 プログラムオフィサー)、高森順子(情報科学芸術大学院大学 研究員、阪神大震災を記録しつづける会)、宮本匠(大阪大学大学院人間科学研究科 准教授)、小川智紀(認定NPO法人STSスポット 横浜 理事長)、田中真実(認定NPO法人STSスポット 横浜 事務局長)。それぞれ異なるテーマをもって活動し、災間の社会における「間」で動くメディアとしてのふるまいを模索している。2023年5月、記憶を(分有)する表現にまつわるメールマガジン「分有通信」発行。bun-tsu編集部には編集者の辻並麻由が参加。

▶ <https://researchmap.jp/community-inf/Saikan-Studies>

阪神大震災を記録しつづける会

阪神・淡路大震災の体験手記を集め、出版する市民団体。阪神・淡路大震災の約1ヶ月後の1995年2月中旬より、神戸で印刷業を営んでいた高森一徳を発起人として活動をはじめ。1995年5月に最初の手記集「阪神大震災 被災した私たちの記録」を出版。手記集の出版は、約1年に1度のペースでおよそ10年にわたって続いた。10巻までの投稿総数は1,134編。10巻の脱稿後の2004年12月に一徳が急逝し、約5年間の活動休止を経て、2010年に一徳の姪である高森順子が事務局長となり活動を再開した。震災から20年目の2015年には10年ぶりの手記集を出版。25年目の2020年には、これまでの執筆者へのインタビューを収録した記録集を出版し、現在まで活動を続けている。

▶ <https://hanshinkiroku.tumblr.com/>

お問い合わせ：デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)
〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4
TEL: 078-325-2235 FAX: 078-325-2230
E-MAIL: info@kiito.jp WEB: <https://kiito.jp/>



災間 スタディーズ

震災30年目の “分有”をさぐる

1995年以降、地震、風水害、コロナ禍など、いくつもの災害が発生してきました。私たちは、すべての被災地の復旧や復興を見届け、共有することが困難な「災間(さいかん)」を生きています。過去の災害の記録や表現にもう一度光を当ててみることに。そこから、経験を想像し、分かちもつ「分有(ぶんゆう)」の態度を探ること。災間スタディーズでは、災厄をめぐって、アートやアーカイブの視点からリサーチを行うゲストを迎え、渦中に生きる人びとが生み出す記録や表現の力について考えます。